

## 植田正治（昭和写真・全仕事Series10）

植田正治／著

朝日新聞社

1983年 6月発行

2階一般開架図書（請求記号：748/S）

昭和初期から平成まで長く写真家として活躍した植田正治。海外での評価も高く、日本を代表する写真家の一人です。

この写真家の作品として私がすぐに思い浮かぶのは、砂丘での写真です。鳥取砂丘、空、雲、そして人。モノクロの世界のなかで、なんとも不思議だけれども美しく、ひきつけられる作品ばかりです。また、子どもを撮ったものは、植田氏の温かなまなざしが感じられる、ぬくもりある作品が多く、これもこの写真家の魅力だと思います。

この写真集は昭和の作品のみですが、昭和という時代をともに歩んだ方には懐かしく、平成という時代に生まれた方には斬新に感じられることでしょう。多くのアーティストに影響を与えた植田正治の芸術性にぜひふれてください。

植田氏は、2000年7月、惜しまれながらこの世を去りました。

彼の生まれ育った鳥取県には、植田正治写真美術館があります。ホームページをご紹介しますので、興味を持たれた方はご覧ください。

→ <http://www.japro.com/ueda/>

## 「シャバヌー ー砂漠の風の娘ー」

スザンネ・ステーブルズ／作 金原瑞人・築地誠子／共訳

ポプラ社

2004年 12月発行

1階児童開架図書（請求記号：93ス7）

シャバヌは、パキスタンに住む12歳の少女。一家はチョリスターン砂漠でラクダの遊牧をしながら生計を立てている。勝気で、自分らしくありたいと願うシャバヌは、イスラム社会の中では生きていきにくい。40歳以上も年齢の離れた政治家の第四夫人となることを周りの大人たちに決められ家出をするが、結局家に連れ戻されてしまう。

砂漠の遊牧民の生活が細かく描かれ、今の日本に住んでいる私たちには理解しがたい、イスラム圏の人々の普段の生活や考え方を身近に感じることができ、“イスラム”に対する見方を変えさせられる。

続編の「シャバヌー ハベリの窓辺にて」（ポプラ社）では、18歳になり、一児の母となったシャバヌが描かれている。